

柘原小学校 六年 江口 瑠輝 「黄金色 夕日を映す 船だまり」

防波堤に囲まれた波静かな船だまり、そこに数隻の漁船、その風景を金色に染める夕日。まるでみごとな一枚の絵画のような情景が、素直な印象をもって詠われています。この句のもつ静かな情感は、懐かしさを伴って心に残ります。

垂水中央中学校 一年 駿河 大介 「夕焼けで カラスウリにも 灯がともる」

真つ赤に熟れた烏瓜、それに夕焼けが射し、まるで瓜の内部に灯をともしたようだという、単なる写生の句ではなく、主観的な印象が技巧を感じさせないほど、美しく詠われています。主観と客観とが一致した好句です。

垂水高等学校 三年 加治屋 里奈 「蝉時雨 命の叫び 夏終わる」

一般に、蝉は数年の地中の生活の後、一夏でその命を終えるはかない存在とされます。それを言外に匂わせて、蝉のはかなさを直接的には表現せず、むしろ蝉の命の賛歌を詠い、晩夏の印象としたところがすばらしい句になりました。

講評

小学校

小学生らしく、あまり技巧にはしらず、素直な印象をそのまま句にしたものを選びました。安山さんの句は、まず空振で驚かす火山の爆発が、経験した人でなくては分からない驚きとして、松永さんの句は細かい観察に基づいた発見が句になっています。中馬さんの句は、小学生の句ですが、大人にもある種の郷愁を感じさせる、情感あふれる句です。池田さんの句は、風の音と虫の音とをコンチェルトに見立てた、やや技巧的な句です。俳句でいう見立てとは、一見無関係に見えるものの共通性を句にする俳句の技巧の一つです。

中学校

中学生の句には、単に風景を句にするというのではなく、大きくいうと人生を句作しようとする傾向が目立ちました。木佐貫さんの句は、「流れに逆らう」という表現のもつ言外の情念への驚きが、おそらく無意識のまま表現されています。白井さんの句は、美しい句ですが、「紅一葉」の表現に、例えば「落ち紅葉」などの一工夫がほしいところです。篠原さんの句の、寒稽古と日の出との組み合わせのもつ緊迫感がすばらしいと感じました。塩満さんの句は、素直な客観的な写生の句ですが、それだけにかえって彼岸花の存在感をよく表しています。

高等学校

中学生の句に比べて、人生についての印象を句にしようとしたのが、比較的少なかったのが残念でした。高校時代は人生の一つの結節点ですから、自分とは何か、自分はこれからどうなるかなどの思いを、どしどし俳句などの言語で表現してみてください。野下さんの句は、花火の消滅に夏の終わりを象徴しようとした句です。いい着眼ですが、いま一工夫といったところです。森満さんの句は、やや子どもっぽい景観ですが、縁日の雰囲気はよく出ています。これを子ども時代の時の経験などに結びつけて表現してほしかったと感じました。